

ヨハネス・パウリ：冗談とまじめ（2）

森 昌 弘

Frühneuhochdeutsch 研究会訳

ここに翻訳したのは1522年刊行の Johannes Pauli: Schimpf und Ernst 第41話—第84話である（第40話までは1990年刊『中京大学教養論叢』第30巻，第4号所載）。使用テキストは1924年刊の Johannes Bolte 編（リプリント版1972年）を用いた。聖書に関しては『聖書新共同訳』（日本聖書協会1987年刊）に拠った。パウリの聖書の引用はほとんどすべてラテン語で，時とすると現今の聖書に一致しない場合，あるいは多少記憶違いと思われる箇所もある。それ故彼自身のドイツ語訳と重複する場合も，異同を明らかにするために，煩雑にはなるがすべてラテン語を添えて訳してある。聖書以外のラテン語も同じように扱った。

この翻訳は，Frühneuhochdeutsch 研究会のメンバーが分担して訳したものを，最後に共同で検討修正したものである（訳の分担表は下記）。1990年10月現在のメンバー氏名はつぎの通りである。青木一行（名城大），大沢峯雄（名大名譽教授），木野茂（保健衛生大），工藤康弘（三重大），精園修三（中京大），中条宗助（名大名譽教授），中山淳子（竜谷大），橋本忠欣（福井大），森昌弘（中京大），山田やす子（皇学館大）（以上アイウエオ順）。

分担表

第41話—第44話	山田	第63話—第66話	森
第45話—第47話	青木	第67話—第71話	中条
第48話—第54話	大沢	第72話—第75話	橋本
第55話—第57話	木野	第76話—第80話	精園
第58話—第59話	森	第81話—第84話	山田
第60話—第62話	精園		

第四十一話 冗談

阿呆が鼻のことである人を侮辱したこと

フランスで起こったことなのですが、かつて僧院長をしている立派な方がいて、阿呆を一人抱えておりました。これはとても愛想の良い阿呆で、皆がどんなに怒らせても、言葉でも、行いでも誰の心をも暗くするようなことはありませんでした。さて、ある時、主人の僧院長は他国の紳士を招待したのですが、この客は、ひょっとして鼻に病気があると起こるかも知れないような、まったくとてつもなく大きな鼻をつけていました。さて、こうして皆が食卓につき、食事を始めようとした時、件の阿呆はずうっとこの客を見つめて、その大きな鼻にびっくりしておりました。そうして阿呆は客を長いこと見つめると、この鼻の大きな紳士の前で食卓に肘をついて、紳士に言いました。「どうしてあなたはそんなに大きな鼻をつけているのですか。どうしてそうなったのですか。」

ああ気の毒に、その人は恥じて真っ赤になりました。主人は下男たちに言いました。「阿呆めを追い出せ。」下男たちは阿呆を広間から叩き出して言いました。「阿呆め、お前に腫物ができればいいんだ。」阿呆は考えました。確かにお前が台無しにしてしまったのだから、お前が埋め合わせなけりゃならないぞ。阿呆はもう忘れられたらと思う、再び広間に入ると、何事もなかったかのように振る舞い、食卓の周りを歩き回って、その後で再び食卓に肘をついて言いました。「ああ、あなたはなんて小さな鼻をお持ちなんでしょう。」それで客はますます恥ずかしくなりました。阿呆はまた広間から追い出されました。しばらくして阿呆はまた前のようにやって来て、客に言いました。「あんたに鼻があろうとなかろうとどうでもいいさ。あんたの鼻が俺に何の関係があるというんだ。」それで阿呆はいよいよもって台無しにしてしまったのです。

常に人を誉めそやし、崇め奉る全てのおべっか使いや、追従者たちの身にも、この阿呆の身に起こったのと同様のことが起こるのです。彼らは、人の愛や恩恵を手に入れたと思っているのですが、彼らが誉めれば誉めるほど、人は彼らに敵意を持つものなのです。というのは彼らは犬が壺を割

るように¹、おもねるからです。

第四十二話 冗談

主人が下男を憎んだこと

ある時、主人が下男に誉められました。主人は言いました。「何故お前は私を誉めるのだ。私を誉めるなんて、お前は私を売るつもりなんだろうと思うぞ。それともお前は阿呆か、さもなければ私に不忠だ。お前には私の欠点が見えないのか。それはお前が阿呆だという証拠だ。でも、私の欠点と罪がわかっているのなら、何故お前は私に損害を被らないように注意しないのだ。それでお前は私に不忠だというのだ。」

これが公正な主人というものでした。

第四十三話 まじめ

阿呆が閏年を知っていたこと

かつて阿呆が一人シュトラースブルクにおりましたが、名をハンス・ゾンタークと言いました。この阿呆は、「今年の聖ロレンツォの日は何曜日になるかね」と尋ねられると、「わかりません」と言いました。それでもう一人が、「お前さんはそれをよく知っているじゃないか」と言いました。すると阿呆はたっぷり丸一時間、尋ねた人が言ったのと同じことを言うはめになりました。「お前さんはそれをよく知っている。お前さんはそれをよく知っている」と。この阿呆はたとえ閏年でも、クリスマスと懺悔節の日曜日の間が毎年どれだけの長さであるか知っていました。阿呆はそれを十年か二十年先まで知っていて、間違えたことはありませんでした。これは天の特別な影響によるものでした。

貴族の館にいる追従者や、密告者や、居候たちも同様です。人が何を言っても、主人がどう言おうとも、返事はいつでも「はい」なのです。主人が「水が山を登っていく」と言えば、下男は「はい、御主人様、私はそれを見ました」と言います。それから例えば、主人が「暖かいな」と言え

1 諺であろう。グリムドイツ語大辞典 122 ページに例文があるが、詳しい意味は不明。

ば、下男は寒いのに「はい、私は汗をかいています」と言います。こういう人々が今、国と民を治めているのです。

第四十四話 冗談とまじめ

阿呆が病気の主人を焼き殺したこと

これは真実として書かれていることなのですが、かつて一人の貴族がおりました。この人は時々貴族たちが国内で売却しているような、多くの村や町を有する管区を買い取りました。貴族は領地を支配下に置き、村から村へと自分に誓いを立てさせました。そして、貴族がやって来ると、実直な人々は貴族に敬意を表して、ある人はこれを、またある人はあれをと贈物をしました。さて、貴族は一人の書記を連れておりましたが、書記は人々の名前を贈物と共に記帳しました。実直な人々は、書記がそれを書き付けてくれるのを喜んでいました。彼らは、貴族がそれを忘れないように、またそれぞれに対して敬意を表すために、そうしていると思ったからです。そして一人がまた一人にとそのことを告げ、誰も引けを取るまいと思いましたが。しかしそうではなかったのです。貴族は自分に最初に差し出された物を、権利として、習慣として得ようと思ったのでした。それで貴族は記帳させましたのでした。貴族は執事や下男たちにも、書き付けてあるように各々から取り立て、要求するように命じました。ある時、この貴族が病気になりました。大勢の貧乏人もかかるのに、金持ち病と言われている足痛風になって、一步も歩けなくなったのです。それで居間にベッドをしつらえさせて、暖炉付きの部屋がない地方でするように、そこで火をたかせました。

貴族は、時々自分を笑わせたり気晴らしになったりする阿呆を一人抱えておりました。ある時、誰も家におらず、かまどに火がついていた時、阿呆は火で遊び始め、火にわらをくべて、ついにそれを火からベッドへ移し、ベッドに火をつけてしまいました。貴族は叫びだし、阿呆に言いました。「阿呆め、火を消せ。お前はわしを焼き殺す気か。」阿呆は火を消そうとはせず、言いました。「俺は消したくない。」貴族は言いました。「何故消したくないんだ。」阿呆は言いました。「だって俺が今消したら、あんたはそれを習慣にしようとするだろう。そうしたら明日もまた消さなくちゃなら

ん。あんたの貧しい領民たちは言っているじゃないか。一度あんたに与えたものは、それをいつも与えなけりゃならんとね。」こうして火はベッドに移り、貴族はベッドで焼死しました。

[知恵の書十一章] 人は何かで罪を犯したら、そのことで贖罪しなければならないのです。このことを主なる神は、セネカが聖パウロへの手紙の中で、主なる神は時として阿呆を通じて語ると言っているように、阿呆を通してなされたのでした。こうして阿呆はこの貴族に、彼の悪い習慣が、この世で肉体的に、そしてあの世では永遠に、焼かれねばならないことの原因であるのだと言っているのです。

第四十五話 冗談

道化が棍棒をその主人に与えたこと

むかしある所に一人の貴族がいました。彼は道化を抱え、これを寵愛しておりました。貴族は彼の為に美しい革の棍棒を作ってやり、こう申しました。「道化よ、この棍棒を、お前よりも道化上手な者以外に遣るでないぞ。」道化はハイと答えました。

さて、ある時のこと、貴族は病気にかかり、毎日のように医者が彼の許を訪ねてはその容態を診ることとなりました。医者がご前から退出してくると、奥方や召使いたちは主人の容態がどのようなものなのか質したのでした。医者は言いました。「あの方は^ゆ逝かれる。きっと。」道化もその場に居あわせていて、医者が奥方や召使いたちに話している様子を聞いていました。そして、「ご主人は逝かれる。きっと」という、医者の言葉を聞くなり、道化は厩の中の馬のところに走って行き、背に鞍が置かれているかどうかを窺いました。ついで馬車のところに走って行って、誰ぞやが馬車のほうの支度をし、飾り立てていはいはしないかと様子を見たのですが、なんら変わった様子は見られませんでした。さて、翌朝も医者が例のごとくやって来て、また例のごとく貴族の許から退出して来ました。召使いや奥方はこの医者に、主人の様子はどうかであるのか、また見立てはどうであろうかと質しました。医者は彼らに答えました。「憂慮すべき状態です。あの方はここに留まることはありますまい。お逝きなされましよう。」

道化は走り回って様子をうかがったのですが、旅支度をしているとも思

えません。そこで彼はご主人の所にみずからおもむいて、こう尋ねたのでした。「旦那様、あなたが旅に出られ、ここに留まることはなかり、などと皆さん方が申しておりますが、どれくらいの期間お留守になされるおつもりでいらっしゃいますか。一年ほどですか。」「それがもっと永いのさ。」「十年ですか。」「もっと永いのだ。どれくらい永くなるのか私にも分からないのさ。」「でもお邸の中ではなんのご用意も見受けられません。そんな事を仰せになるなら、貴方に私の棍棒を差し上げることと致しましょう。貴方のほうが私よりずっと冗談がおじょうずですから。私がもし永い旅に出立するのでしたら、差しあたって必要な品物を先方に送っておいて、生活に不便のないようにいたします。さあ棍棒をお受け取り下さい。これはまったく貴方様にこそ相応しいものでございます。」

貴族は道化のこの言葉に感じ入り、己の身を正し、遺書をしたため、教会への寄進を定め、死出の旅立ちに備えました。こうして彼は永遠なる神の恩寵の子となったのであります。神は道化ごとき者の口を仮してまで、かく語りかけてこられたのです。

第四十六話 冗談

天国に入りたがらぬ道化のこと

昔、ある所に一人の騎士がいました。彼は一人の道化を抱えていました。ある時この道化が病気になりました。主人は道化の許を訪ね、慰めて言いました。「ハイニー、静かに黙っていなさい。そのうち一緒に神様の所に行こうのう。」主人があまりにもしばしば、そのうち一緒に神様の所に行こうなど同じ事を言いましたので、ある時、道化は彼に申しました。「私は神様の所に行きませんよ。」それを聞いて主人は言いました。「なぜお前は神様の所に行きたくないのだ。」道化は申しました。「さればでございます。貴方も神様の所に行く気持ちはございますまい。貴方は地獄に行くおつもりでございます。ですから私も地獄に行こうと思っております。此の世で貴方のおそばに居たのですから、地獄に行っても私はやはり貴方のおそばに居たいと思うのです。」主人は道化に言いました。「私が地獄に墮ちるなど、どうしてお前に判るのか。」道化は主人に答えました。「貴方のご領地に住む人々は誰でも、貴方が悪い人で、ああだこうだと貴方の行状を噂

いたしております。そして、悪い人間は決して天国の神様の許に行くことはできないのです。」騎士は道化の言葉を教訓としてその行状を改め、まこと敬虔なる人物に生まれ変わったのでありました。

されば汝もまた、神父を通して汝に語り掛けられる神の言葉、即ち説教をしみじみと噛みしめるが宣しい。神父たちは汝に語り掛けるがごとくには自ら行わず、また害悪を前にして、汝を戒めるがごとくには自らの身を守ろうとしない点で多分、愚か者といえましょう。これらの神父たちは聖ヒエローニムスが書簡で語っているがごとく、灰の中を流れる湯のごときのものであります。湯はその清らかさを失い、灰汁と変じるのですが、なお他の人々を洗い清めるのであります。その神父たちはまた洗礼盤の水とも譬えられましょう。洗礼盤の水は、幼な児を天なる国に送りいだすも、自らは地の国から追放されたものであります。しかしなおその水は天国に赴く人によって卑しめらるべきではありません。ですからたとえ地獄に堕ちる道化の説法であろうとも、それが真実である限り軽視さるべきではありません。なぜならば、愚か者は賢者と同じく真理を語るやも知れないからであります。

マカバイ記 二、第八章：ニカノールは説けり。「神はユダヤ人を庇護し給う」と。

第四十七話 まじめ

愚か者が邪教徒を焼き殺したこと

ケサーリウスの書いているところによれば、ある時のこと、神は愚かで悪魔憑きの男の手を借りて、邪教徒を罰せられたということであります。むかし、カーメラッハの町にエリーギウス・ボーグリスという邪教徒が住んでいました。そこへドミニコ会の異端審問官たちがやって来て、この邪教徒を焼き殺そうとしました。彼等はその頃、当地で多くの異端者たちを焚刑に処していたのでした。その邪教徒は彼等の手から逃れるため、正気を失い悪魔にとり憑かれた風を装いました。男は身内の人たちによって縛られ、聖オイヒアーリウムの許に連れて行かれました。このような場合、すべてこの聖人のところに連れて行くのが通例で、聖人が彼等を矯正したのです。こうして悪魔憑きの男は教会のベッドに鎖でつながれましたが、

この時ほかにももっと気違いどもがそこに寝かされていまして、彼等を見張る監視役が定められました。時にある神学生が悪魔に取り憑かれてしまっていたのですが、神様のご意志によって夜中は鎖から解き放たれ、教会の中をあちこち歩き回っていました。そして教会の中で見つけた布団やら板切れやらを、かの邪教徒のベッドの下に、また彼のからだのうえに積み上げました。邪教徒はその様子を見ていましたが、しかし気に止めませんでした。それを神学生の愚かさ、痴けさの故と思ったのであります。ついに神学生はそこにあまた燃えている吊りランプの一つに近付き、火を取るとこれを邪教徒のベッドに移しました。男は「人殺しー」と叫び始めました。二人の夜番は眼をさまし、駆け寄ってきて火の手を防ごうとしたのですが、この時たまたま神学生の手一本の剣が握られていたので、彼は周囲をその剣で薙ぎまわして人々を追い払い、ついに邪教徒はベッドの中で焼け死んでしまいました。このようにして神学生が瀆神を罰したので、その後神様はこの学生に贖宥をお与えになりました。悪霊は神学生から離れ、彼は罪から解き放たれ、再び理性と分別を取り戻したのであります。

第四十八話 冗談

道化が音で支払えと判決を下すこと

道化でも、ひょっとすると、賢者も思いつかないことを思いつくことがあります。ヨハネス・アンドレーは、ある道化のことを書いています。ある時、物乞いの貧しい男が食堂へやって来ました。そこでは、大きい焼き肉を串にさして焼いていました。貧しい男は、持ってきた一きれのパンを焼き肉と火の間に入れて、焼肉の匂いをパンにしみこませて、そのパンを食べました。貧しい男は、パンがなくなるまで、そうやって食べて、出て行こうとしました。すると、亭主は代金を請求しました。貧しい男は言いました。「あんたは食べ物も飲物も何一つ出してくれなかったじゃないか。なんの代金を払えと言うのだい。」亭主は言いました。「お前さんは私の物、つまり焼肉の匂いで腹一杯になった。そのお金を払いなさい。」二人は一緒に裁判所へ行きましたが、この件は別の裁判日まで延期されました。

裁判官の一人が家に道化を抱えていて、食事の時、この事が話題になり

ました。すると道化が言いました。「その貧しい男には、お金の音で亭主に支払わせたらい、焼肉の匂いで満腹したのと同じでさあ。」さて、裁判日が来て、この判決の通りになりました。この判決は、道化が思いついたものです。

第四十九話 冗談 道化が司教を叩くこと

私たちはある修道院長の話を読みます。その修道院長は道化を抱えていました。ある時、盛大な祭典があって、修道院長は典礼司式者となり、夕べの礼拝を始めることになりました。さて、夕べの礼拝の前には無言で主の祈りを捧げ、その後で夕べの礼拝が始まります。こうして、修道院長は夕べの礼拝を唱え始めました。「Psal. 69. Deus in adiutorium meum intende. (詩編 第六十九, 神よ, 私の救いに心を向けて下さい。¹)」聖歌隊全員が、いつものように修道院長に答えました。「Domine, ad adiuuandum me festina. (主よ, 速やかに私をお助け下さい。²)」すると、道化は修道院長の所へ行き、その片方の頬を叩き、したたか殴りつけて、言いました。「貴方は教会で、こういう大騒ぎをしでかした。」

第五十話 冗談

道化が、法学者は医者の中へ行くと判決を下すこと

ある時、パヴィアで、法学博士たちと医学博士たちの間で争いが起こりました。どちらの学部も、行列で自分の方が先に行くのだと言って譲らず、先に行くのは法学者か、それとも医者か、判決を下してくれと、一緒にミラノ公爵に訴え出ました。公は学者たちと相談しましたが、学者たちにも分かりません。公は道化を抱えていましたが、道化はその話を聞くと、言いました。「その件なら、判決を下せますがね。」公は言いました。「ほう、どんなふう？」——「こんなふう。普通、刑場へ連れ出す時は、犯人

1 詩編第六十九にこの言葉はない。

2 詩編第七十第一節。

は先を行き、刑吏は後から行くものでさあ。¹」

第五十一話 冗談

道化が主人を弁護すること

ある教皇が、普通教皇が皇帝や国王に宛てた手紙を書くように、一人の皇帝に宛てて、*Dilecto in Cristo filio nostro*. (我々の愛する息子フリデリクスへ) 云々と書きました。この手紙が公の場で読まれたとき、その皇帝に抱えられている道化が言いました。「これは嘘だ。ご主人様は坊さんの息子なんかじゃない。お父上もお母上も存じているが、信心深い立派なお人だった。」

第五十二話 冗談

道化が評判の鷹を食うこと

ある時、一人の貴族がおりました。一羽のはいたかを飼っていて、それで猟をしては上機嫌でした。よその客が来ると、食事中、それがどんなにいい鳥かと、自慢話で持ちきりでした。ある時、主人が馬で出かけました。道化はその鳥を殺し、焼いて食べてしまいました。貴族が帰って来ると、道化は主人に言いました。「あなたは私をだました。あれがどんなにいい鳥かって、言っていた。焼いて食べたが、ちっともいいことはない。ずいぶん堅かった。」云々。

これは、つまみ食い好きの人間は奇妙な食べ物を欲しがる、ということです。

第五十三話 冗談

百姓が鶏の中に二百個の卵を探すこと

一人の百姓の話を読みます。この百姓、当然阿呆に教えられてもいい男で、毎日一個ずつ卵を生む雌鶏を飼っていました。百姓は考えました。「この雌鶏の腹の中にももちろん百や二百の卵が入っている。それがみんな一

1 この話を踏まえたハンス・ザックスの寓意詩があるが、それによると、悪者の法学者が先を行って、それを薬で処刑することのできる医者が後から行くという風になっている。

度に手に入りゃ、それで何かやれるぞ。一つだけじゃしようがない。ひとつ殺してやれ。」百姓は雌鶏を殺して、切り開いてみましたが、中には何もありません。こうして、百姓は雌鶏も卵もなくしてしまったのです。

欲の深い人も、早く金持ちになろうとすると、こういうことになります。ひょっとして余り沢山欲しがり過ぎると、余りに少ししか手に入りませんよ、云々。

第五十四話 まじめ

踊る市参事会員のこと

ある家で、人々が歌ったり踊ったりしていました。その家には井戸があって、その水を飲むと、輪になって踊らないではいられなくなるのです。大ぜい人々がやって来て見物しました。見物人にも名水が振る舞われましたが、飲むが早いか、これまた踊り始めました。すると、一人の賢い男がいて、みんながそんなに歌ったり踊ったりするのを罵り、自分もそこへ行って、一体どういう人々か、見ようと思いました。この男も一杯どうぞと差し出されて、それを飲むやいなや、これまた歌い踊り始めました。先ほど罵ったことを自分がやっているのです。

今でもこの通りです。参事会の会員たちを罵り、「私が参事会の中にいれば、こんなふうには演説しよう、そしてそれに同意しようとはしないだろう」などと、悪口を言う人をあなたもご存知でしょう。そして、これが大評判になるのです。さて、その人が参事会へ来ると、まったく同じことを繰り返すだけで、そのほかは口を開こうともしない。そして、人のいる所では、こう言うのです。「誓って言うが、どうしてもそうならねばならない、ほかはどうしようもないのだ。この目で見なかったら、信じはしなかったらう。」

第五章 修道会の人々と修道士たちについて

第五十五話 冗談

豚飼いが僧院長になること

かつて一人の僧院長がおりました。その僧院では、一人の貴族が財務管

理を行っていました。貴族はその僧院長が気に入らなかったけれども、僧院長をやりこめる種を見つけることができませんでした。そこで僧院長を呼び寄せて言いました。「僧院長、そなたは三日の後に、わしの三つの質問に答えなければならない。まず第一に、わしにどれほどの値打ちがあると思うか申してみよ。第二に世界の真ん中はどこにあるのか。第三に幸福と不幸の間にはどれほどの隔たりがあるか。そなたがこの三つの間に答えられないなら、そなたを僧院長に留めておくわけにはまいりませんぞ。」

僧院長は悄然として家路につきました。野原へふらふら歩いていくと、豚飼いのところへ来ました。豚飼いは言いました。「旦那さま、とても悲しそうですね。どうかなされましたか。」僧院長は言いました。「わしの悩みは、おまえの手に負えるようなものではない。」豚飼い「そんな事は分かりませんよ。おっしゃってみて下さいよ。」僧院長「わしは三つの質問に答えなければならないのだ。」豚飼い「旦那さま、くよくよしないで元気をお出し下さい。私とその質問全部に立派に答えてさしあげます。その日がきたら私に修道服を着けさせて下さい。」

その日がやって来ました。僧院長が修道士を従えてやって来ました。つまり僧院長は、自分の代わりに豚飼いを行かせたのです。貴族「僧院長、参られたか。」「ええ、参りました。」と僧院長。「では、最初の問にそちは何と答えるかな。そなたはわしに、いかほどの値打ちがあると思うかな。」僧院長「銀貨二十八枚の値打ちと存じます。」貴族「もっと高いのではないか。」僧院長の姿をした豚飼い、「いや、そんなことはございせん。」貴族「何故だね。」僧院長「それはですね、キリストは銀貨三十枚で売られました。だから皇帝は銀貨二十九枚、貴方は銀貨二十八枚だと思います。」「よくできた。」次の問題「世界の真ん中はどこにあるか。」僧院長「私の教会が世界の真ん中にあります。お信じにならないならば、計ってみて下さい。」第三問「幸福と不幸の間には、どのくらいの隔たりがあるか」僧院長「一晩とは離れておりません。わたしは昨日は豚飼いでしたが、今日は僧院長ですから。」貴族「誓って言うが、是非そなたは僧院長に留まって頂きたい。」こうして豚飼いは事実また僧院長に留まりました。しかし当然のことですが、豚飼いは昔の僧院長も尊敬しました。

第五十六話 冗談

修道士は何事によらず第一人者たることを望むこと

昔一人の枢機卿がいました。彼の副司祭として一人の修道士がいましたが、その男は枢機卿のお気に入りでした。ある時、その修道士が枢機卿の前にあるテーブルの向こう側に立ちました。すると枢機卿が副司祭にこんなふうに言いました。「*Quidquid agit mundus, monachus vult esse secundus, id est quietus.*（世人がいかなることを行おうとも、修道士は第二のもの、即ち平穩であらんとする。）」「悪行であれ悪戯であれ、何を行うにしても、修道士は第二番目であることを望むものだ。」修道士は言いました。「いいえ、枢機卿さま、そんなことはありません。*Vult esse primus.*（彼は第一人者であることを望む。）修道士は二番目である事を望みません。第一人者たる事を望むのであって、二番目ではないのです。」枢機卿は笑って言いました。「よくできた」と。

第五十七話 冗談

鳥に脚が一本しかないこと

かつて一人の騎士がいました。この騎士の聴罪師として、フローレンスに一人の修道士がいました。修道士は、四旬節の間毎日そこでお説教をしていました。復活祭の翌日、騎士は聴罪師に敬意を表したいと思い、一緒に食事を取るようと、聴罪師を客として招待しました。聴罪師は、礼拝が終わらないうちにやって来ましたが、騎士はまだ教会に残っていました。聴罪師は腹がへっていたので、台所へやって来ましたが、そこには、きじや鶴などの串にさされた様々な焼肉がありました。聴罪師は料理女に言いました。「焼肉は今が一番食べ頃だ。鶴の腿肉をよこしなさいよ。そうすれば待っておりますよ。」料理女は言いました。「ごもっともですが、そうするわけには参りません。鳥の肉をそんなふうに傷物にして食卓に出せば、私は家から追い出されてしまいます。でもご自分でお取りになるのでしたら、私は責任がありませんから。」聴罪師はナイフを持って焼肉のところへ行き、腿肉をむしり取りました。料理女はさらに白パンと半マースのワインを与えました。聴罪師はそれを平らげました。

さて皆の者がテーブルにつき、焼肉が運ばれると、鶴は傷のある側が下にして置かれておりました。騎士が「もう一方の脚は、どこへ行ったのだ。」と言って、料理女に怒ろうとしました。司祭は騎士のかたわらに腰を下ろしていたので、騎士をなだめようとして騎士の耳にささやきました。「お客様の前では静かになさって下さいよ。食事が終わったら、鳥がもう脚を一本しか持っていないことを実証しますから。」分別のある騎士は、そっとそのままにしておきました。

食事が終わると、騎士は言いました。「さあ司祭さん、散歩に出かけましょう。」こうして市民や貴族の子供たちが走ったり跳びはねたりしている町の外へと出かけて行きました。途中騎士が言いました。「司祭さん、あなたは鳥がもう脚を一本しか持っていないとおっしゃいました。一体それはどういうことですか。」司祭は言いました。「そのことを私はあなたにお見せしようと思います。」こうして恐らく三十羽か四十羽の鶴がいるフローレンス市外の草地へと騎士をつれて行きました。そこでは鶴の多くはいつも一本足で立っているような恰好をしているのです。司祭はそれを騎士にみせて言いました。「ごらん下さい、お殿様。鳥はほとんどどれもただの一本足でございましょう。」騎士は手を叩いて鳥を追い立てました。鳥たちは驚いて首ともう一方の脚を伸ばしました。そこで騎士は司祭に言いました。「一体どういうことかね。見てみなさいよ。あいつらは脚が二本あるじゃないか。」すると司祭は言いました。「お殿様。あなたがそんなふうに手を叩き、テーブルの上でそんなふうに従い立てられたら、もう一本の脚も出てきたでしょうがね。」

第五十八話 冗談

聖書に従って鶏を切り分けたこと

ある時聴罪師の修道士が、ある貴族に、食事をともにするように客として招かれました。食卓に座って食事をする時、貴族はそこにいましたが、二人の息子や二人の娘もそこに座っていました。ところで焼き肉が出ましたが、とにかくそれはうずらか鶏でした。この貴族は、修道士の皿に鶏をおいて切り分けさせました。修道士は、鶏を彼の前において言いました。「私にはできません。誰か鳥を切りわけを教えて下さるのでしょうか。」

か。」貴族は彼が切りわけなければならないと言って、鳥を再び修道士の皿におきました。修道士は言いました。「私が切りわけなければならないのでしたら、聖書に従って切りわけようと思います。」夫人が言いました。「ええ、どうぞ。そうして下さい。聖書に従って切りわけて下さい。」修道士は、鶏から頭を切り離し、それを貴族の前におきました。それから首を切り離し、夫人の前におきました。つぎに羽を切って、二人の娘、二人の乙女の前におきました。つづいて二本の脚を切り離し、二人の息子の前におき、鳥の胴の部分は一人で全部食べ、その一部でさえ誰にも与えませんでした。

修道士が一人で鶏を食べてしまいましたので、貴族は言いました。「聴罪師殿、鶏をそのように切りわけよということは、どこに書いてあるのでしょうか。」修道士が言いました。「旦那様、私の頭の中に書いてあります。あなたが家の頭です。それで鳥の頭は当然あなたのものです。奥方様はあなたにすぐ続く方で、頭に続く方です。それで、首のところが奥方様のものになります。羽はお嬢様方のものです。お嬢様方は、心の中であちこち飛び回り、どんな男と結婚するのか、持参金がいくらもらえるのかと、心配していらっしやいます。それで当然羽がお二人のものです。二本の脚は二人のご子息のものです。これは二人のご子息に支えられて、ご一族が立ち、脚は鶏の体を支えているからです。当然脚はご子息のものです。さて頭も、首も、羽も、脚もない鶏は、不格好な形になりました。僧服を着た修道士は、背中にくちばし¹をつけております。それで鶏は私のものなのです。」

第五十九話 冗談あるいはまじめ

神が保証人になり、修道院長が支払をしたこと

昔一人の貴族がいました。この貴族は戦争である市民の息子を捕らえ、城に連れ帰り、塔の牢獄に閉じこめました。この息子はしばらくの間、その塔に捕らえられていましたが、その貴族に、自分のところにきて、話を

1 修道服にはフードがついているが、使用しないときは後ろに倒してある。それを鳥のくちばしに見立てたのである。

聞いてくれるように頼みました。貴族が来ると、彼は言いました。「殿様、私がここに捕らえられていても、あなたにも私にとっても何の役にも立ちません。身内のものが、私が釈放されるように、百グルデンを送ろうとはしません。私が帰国できるよう、よろしくお取り計らい下さい。八週間以内に戻って来て、誠実な人間の証としてその金を持って参ります。貴族は言いました。「誰を保証人にする積もりだ。」捕らえられていた男は言いました。「誰もおりません。主なる神を保証人として、この保証人にかけて守ることを誓います。」「その保証人を認めよう」と貴族は言い、誓いをさせて、彼を帰国させました。

こうしてこの哀れな若者は郷里に帰り、持っていた財産をすべて売り払って金を用意しました。しかし約束した八週間では用意することができず、三週間期日に遅れました。

ある時この貴族が馬で野外に出かけ、二人の家来が馬で彼に従っていました。するとある修道院長が一人の従者をつれて、二頭のすばらしい馬に乗ってやって来るのに出会いました。この貴族は二人の家来に向かって言いました。「見ろ、お前たち、元気のよい二頭の馬に乗った修道士の様はなんだ。騎士のように金をかけて乗っている。奴はろばに乗らねばならないのだ。見ておれ、一つやってやろう。」彼は彼らのところへやって来ると、手綱をつかんで言いました。「もし、どなたですか。あなたのご主人はどなたですか。」修道士は答えました。「私は神に仕えるもので、神が私の主人です。」それで貴族は言いました。「丁度よいところに来てくれた。捕虜が一人いて釈放してやったが、その男はあなたの主人を担保にして、保証人にした。だが神からはなに一つ取れない。神はあまりにも強大すぎる。だから神のしもべに要求したいのだ。」そしてこの修道士を歩かせて、城まで一緒に連れて行き、持っていたものを取り上げました。

しかし捕らえられていた男は、再びやって来ました。彼は貴族の足元にひれ伏して、金を渡そうとして言いました。「貧しい人々の金を、これ以上早く持って来ることはできませんでした。怒らないで下さい。」貴族は言いました。「よし、立って金をしまい、どこへでも行くがいい。お前の保証人が支払をしてくれたからだ。」

この例は、修道会の人々が行っている、悪い例を教えるのに役に立ちま

す。彼らは大きな馬に乗って威張ったりしています。貴族たちはそれを見て、寄進したものが虚栄のために使われ、神を敬うという目的以外のことに使われていると、腹を立てるのです。

第六十話 冗談

接待係が僧院長にひたすら忠勤をはげんだこと

昔ある僧院で一人の男が僧院長になりました。この男は貧しい人々への施物をやめ、僧院内でも一番けちで、欲ばりな僧たちを外部と関わりのある職務、たとえば接待係、門番、施物配分係等に任じました。ある時一人の吟遊詩人で愉快的な男が泊まっていきました。この男は僧院へ冬にやってきて宿を所望しましたので、断ることはできませんでした。接待係はその男を悪臭がたちこめるひどい部屋に案内し、うすいスープ、ふすま入りの固いパン、酢のようにすっぱいワインをだしました。明かりはだしませんでしたので、吟遊詩人は暗闇のなかで食事をしなければなりませんでしたし、その晩は夜があけるまで固いベンチで寝なければなりませんでした。

さて、夜があけると、男は立ち去ろうとして、こう考えました。「あの接待係の結構なもてなしに報いるには、どんなお返しをしたらいいのかな。」男が立ち去ろうとしますと、僧院長が祈りながら僧院の前を歩いていくのが見えました。そこで吟遊詩人は僧院長の前にひざまずき、泊めてもらったお礼をこう言いました。「貴方様にはお礼の申し上げようもございません。ここ十年来昨晚ほど歓待されたことはありません。接待係の方は昨晚私のために大小の魚を煮てくださり、ワインを三種類と白パンを持って来てくださいました。そこで私たちは早ミサの時刻まで気持ちのいい暖かい部屋でいっしょに宴をはりました。宴が終わりますと、係の方は寝るようにと立派な床へ案内していただきましたが、その床のシーツは真っ白で、きれいにととのえられ、準備してありましたので、私はぐっすり眠りました。私が今しがた別れの挨拶を致しましたところ、係の方は私に立派なナイフを一組くださいました。だから私が貴方様に御礼申し上げるのも当然でございます。」こう言うと吟遊詩人は立ち去りました。

僧院長は激怒しました。僧院会議が開かれると、僧院長は接待係につめより、例の男が言った言葉を取りあげて、接待係を叱責しました。接待係

はそのことをけんめいに否定しましたが、僧院長は本当にちがいないと思
い、接待係に鞭でしたたか懲罰をくわえさせました。

こうして吟遊詩人は接待係に復讐し、接待係は解任されて、別の人がそ
の職をつぎました。

第六十一話 冗談

僧が取られたものを腹に入れて持ち帰ったこと

ある領主が聖ベネディクト会の僧院を所有し、理事長として僧院長が牛
や馬や豚を飼うのを監督していました。僧院長と領主が不和になり、領主
はその僧院から家畜、雄牛に雌牛に子牛、羊や馬等を取り上げました。僧
たちは肉を食べませんでした。下僕たちのために、また売るために必要
でした。僧院長は家畜が取り上げられたことを悲しみ、それを返してくれ
るよう領主を説得できないものかと、僧院内で最も学識のある二人の僧を
領主のもとに派遣しましたが、二人は何の役にも立ちませんでした。僧院
長はしばらくして別の二人の学識ある僧を派遣しましたが、やはり無駄で
した。その後で僧院長は僧院内で最も無学で愚直な僧を呼び寄せ、その男
にこう言いました。「いいかね、領主のところへ行ったら、手に入る肉をで
きるだけ持ち帰ってくれ。」

その無学な僧が領主のところに着いたとき、領主はちょうど食事をする
ところでした。そこで領主はこう言いました。「君、こっちの食卓にすわっ
て、いっしょに食べたまえ。」その僧は着席すると、食卓にだされるすべて
の御馳走を臆せず平らげました。こうして食事を終わったとき、領主がそ
の僧に言いました。「君、わしは驚いたよ。君のところの決まりでは肉は食
べられないのに、君は今がつがつ食べたね。君は決まりに背いたんじゃない
かね。」僧は答えて言いました。「いいえ、領主様、私は院長様の言いつ
けに従って肉を食べたまでです。と申しますのも、私が院長様のもとを立
ちますおり、院長様はこうおっしゃいました。『手に入る肉をできるだけ持
ち帰ってくれ』と。私がつくづく考えますのに、私が手に入れることができ
ます肉は、腹のなかに入れて持ち帰るぐらいのものです。それゆえ私は
あのようにがつがつ食べたのです。」そこで領主は笑って言いました。「よ
ろしい、君には腹のなかの肉以外にも持ち帰ってもらおう。」こうして領主

は、元來僧院のもので、彼がそこから奪ったものを返却しました。

それゆえ愚直は場合によっては策や知にまさるのです。

第六十二話 まじめ

僧院長が罷免されたこと

昔ある侯国の僧院では、僧院會議で僧院長の候補者を二人選ぶという習慣がありました。そして領主がその二人のなかから一人を選び、その人が僧院長となりました。ある時僧院長がなくなって、僧院會議が二人の候補者を選んで推薦しました。領主にどちらか一人を選んでくれというわけですが、僧たちは領主に出自がきわめて低い、親戚も少ないほうの僧を選んでほしいと願い出ました。その男のほうがもう一人の男よりも聖職にふさわしいというのでした。ところが、そのもう一人の男は事務長職にあったので、領主に百か二百グルデンを贈与して、自分を僧院長にして欲しいと言いました。領主もその贈り物のために、またその男の親戚のために、その男を僧院長にしました。その男は貴族の出でもあったのです。さてその男が僧院長になると、伯爵のように十六頭立ての馬車をのりまわし、職務に注意を払わなくなりました。

それは領主の気に入らず、顧問の一人にこう言いました。「残念だ、もう一人の僧、出自が低いほうの男を僧院長にしておくのだった。そうすればこんな困ったことにはならなかったのに。あの男を辞めさせる口実が一つでもあれば、もう一人の男を僧院長にしたいのだが。」この顧問は領主にこう言いました。「閣下、僧院長を辞めさせる口実を一つお教えしましょう。あの僧院では各人がいついかなる時でも針を一本携帯するのが規則であり、決まりとなっております。一度当事者全員が出席している僧院會議におでかけになり、僧院長に針をみせろとおっしゃいませ。針を持ってはおりますまい。つづいて僧院長にしたいもう一人の男に針をみせろとおっしゃいませ。この男は針をもっております。というのもこの男には事前に指示しておくのです。こうして閣下は今の僧院長を罷免する口実がみつかります。この男は小事に軽率で怠慢ですから、大事においても怠慢でない筈がございません。」領主はそうすることに心を決め、手配がなされ、領主は進言されたとおりにしました。そして針については予定どおりに事が運

び、僧院長は罷免され、もう一人の男が僧院長になりました。

この例は様々なことに当てはまりますが、特にある人に悪意を抱いているとき、口実は見つかるものだという例です。

第六十三話 冗談

ミラノである博士に食事が届けられたこと

昔ミラノの跣足会修道士に、一人の博士がおりました。この人は立派な方で、沢山の一流市民の男女を告解者として持っていました。この人たちは彼に時々言いました。「博士、あなたのところにもし異国の方や、異国の神父の客がある時には、私どもにおっしゃって下さい。そうして下さいれば、一品か二品料理を用意して、よいワインをお届けします。」

ある時この修道院長に客があったので、信心深いある市民の婦人に話しました。「あなたも私も恥ずかしくないような、ご馳走を何か用意して下さい、客がありますので。そしてそれを四時に届けて下さい、夕食にしますから。」婦人は言いました。「はい、そう致します。」彼女は彼に言ったように、上等の黒胡椒のソースに獣の肉を用意しました。それからそれを息子に渡し、聴罪師のところに持って行かせました。上等のワインを入れた瓶は首にかけさせました。少年は仲間を自分のところに連れて来て、黒胡椒の料理を食べ、上等のワインを飲み、博士には何も届けませんでした。

博士はずっと待っていましたが、何も来そうになく腹を立てました。その後自分に恥をかかせ何も届けなかったと、その婦人を非難しました。婦人は言いました。「神父様、息子に届けさせました。」聴罪師は言いました。「彼がどこへ届けたのか、尋ねて下さい。私には何も届きませんでした。」その婦人は息子に、どこに届けたのか尋ねました。息子は答えました。「僕が修道院へ持って行って博士のことを尋ねると、一人の人がやって来て僕からそれを取り上げて、『私が召使いだから持って行く』と言いました。」母親は、その人を見たら見分けられるかどうか尋ねました。少年は、「ええ、分かるよ」と、言いました。

司祭も修道士も、すべてが集まる日が決められました。少年は全員の前に連れて行かれ、よく見て、どの人が悪事を行ったか教えることになりました。この少年は二、三度歩き回って、最後に言いました。「僕には誰が誰

だか分からないよ。みんな同じ灰色の服を来ているんだから。」こうして彼らすべて、そして少年も名誉を失いませんでした。

第六十四話 冗談

フランチスコ会派の修道院長が、領主の前でたった一言だけ話したこと

ミラノに跣足修道会の修道院長がいました。この人は、ミラノ大公に非常に気に入られていて、足りないものや願い事があると、大公を頼みの綱にしました。ある日修道院長は修道士たちに食べるものを与えられず、ミラノ市内のどこに行っても何も手にはいらないということが起こりました。それで大公のところへ出かけて、訴えざるをえなくなりました。

彼が城にやって来ると、大公は学者や貴族たちと重大な事件のことで会議をしていました。院長は大公が中にいる広間の前にやって来て、大公のところに行きたい旨を伝えさせました。大公は、今やらなければならないことがあると伝えさせました。院長は重ねて、一言ですむ用事ですと伝えさせました。大公は、一言だけ耳を傾けてやる、もし一言以上を話したら、修道服の上からさんざん叩かせると伝えさせ、中に入るように命じました。院長は大公の前に来ると、お辞儀をして言いました。「スープ。」そして深々とお辞儀をして退出しました。

殿様も他の偉い方々も大笑いしました。修道院長が修道院に帰る前に、ワイン、パン、バターなど皆が必要としていたものが、修道院に着いていました。彼らはその日の食物や飲物を手に入れただけでなく、その後何日も分まで手に入れたのでした。

第六章 修道女について

第六十五話 冗談

十二人の神父に十二人の修道女

私たちは修道士について沢山の話をしましたので、修道女についても、少し書いておくのが穏当でしょう。というのは尊師の方々が話をされるように、修道士と修道女は密接な関係にあるからです。昔ある修道院がありました。それを別の言葉で言わねばならないとすると、慈善施設（そこに

はわが国にも沢山いるように、娼婦たちがいますが)、貴族の施療院などとなるでしょう。当時一人の貴族がいましたが、彼は両親が寄進した聖堂を取り戻そうとしました。それでお互いに訴訟を起こし、それには大金がかかりました。尼僧院長は、「院内の非常に美しい四人の女性を着飾らせて、彼女らを連れて、一緒にご主君の前に出なさい、そうすれば慈悲深いお殿様を見つけることでしょう」と、助言されました。院長はその忠告に従いました。

さて彼女が四人の着飾った女性と領主の前に出ると、殿様は、内陣席を持つ修道女と聖務共唱修道女とは何人いるのかと、尋ねました。尼僧院長は殿様に恭しく言いました。「私たちは二十四人です。」領主は言いました。「司祭や副司祭は何人いるのか。」尼僧院長は答えました。「殿様、司祭は十二名おります。」領主は笑って言いました。「それは決め方が悪い。逆でなければならぬ。」院長は領主が何を言おうとしているのか、また彼が彼女らを娼婦と考えていることが分かりました。それで尼僧院長は言いました。「いいえ、殿様、よい決まりでございます。十二人の司祭がいて、それぞれが自分の相手を持ちます。残りの十二人の修道女はお客様のためにいるのです。」領主は笑って言いました。「院長、うまく答えた。帰ってよい。貴族がお前たちを煩わさないようにうまく納めてやろう。」

第六十六話 冗談

かささが修道女を娼婦とののしったこと

フェリクス・ヘメルリン¹は、領主と過ちを犯した女性は、百人の百姓と関係したかのように、娼婦と言われると書いています。また一人の神父と関係した修道女は、四十人の修道士と関係したかのように、娼婦と言われました。このように大罪を犯して死ぬ人は、聖書に書かれているように、

1 フェリクス・ヘメルリン (Felix Hemmerlin) (1388-1459): Hämerli, Heæmerlin とも書く。チューリヒの裕福な家庭に生まれ、父は聖ペテロ教会の管財人であった。エルフルト、ポロニアで勉学後、書記を経て、現在のスイスのゾロトゥルンの司教座教会首席司祭 Propst に選ばれ、また教会の合唱指揮者 Kantor としても活躍した。著作はほとんどがラテン語であり、法律や教会に関する記述が大部分で、わずかに詩が残されている。

百の大罪を犯したかのように非難されています。「Jacob. 2. Qui offendit in uno, factus est omniu mreus. etc. (ヤコブの手紙 第2章 一つのこととて過ちを犯すものは、あらゆることとて罪を犯すものとなつた。)」ヘメルリーンは、ある男と秘かに罪を犯した修道女のことを書いています。ある時この修道女が、ある市民の家の前を通り過ぎました。この市民はかささぎを一羽飼っていましたが、かささぎが女性によく言うように、彼女のことを「女郎、女郎」と大声で叫びました。修道女は驚いて、独り言を言いました。「誰がお前に私の秘密を喋つたのだ。」彼女は「天は汝の罪を明らかにするであろう」と、書かれているかのように思いました。そして改心して、二度と悪いことはしませんでした。

第七章 司祭について

第六十七話 冗談

司祭が四グルデン支出していたこと

昔、一人の司祭がいました。この司祭は、下女を自分の妾に世話させた財務長官に毎年四グルデンずつ、長年に亘つて支払っていました。その後この司祭は女を遠ざけ、清らかな生活を送っていました。ところが例の長官がやって来て、いつもの四グルデンを貰いたいと言ひ張りました。司祭はこう言ったのです。「財務長官さん、あなたに渡していた四グルデンの元になる知行地をわしはもう持つておりませんのじゃよ。あの女は今では別の男のものでな。その男にあの四グルデンを出すように言ひつけなさらよい。」 *faceta responsio*. (気のきいた応答。)

第六十八話 まじめ

司祭がぬかるみの中を歩いたこと

昔、ある村に子供持ちで遊び人の司祭がおりました。その教区の人たちは、この司祭のことを腹立たしく思っていました。彼は立派な説教僧でしたが、人々はその司祭の言葉よりもその所行を見習っていました。この立派な司祭は、人々を正道に戻すには、どう振舞つたらよいかと考えました。ある時この司祭は終油を持って一人の病人の許へ出向きました。教

区民は皆そのあとについて行きました。司祭はぬかるみを通りましたが、そこは泥が一番深いところでした。その頃の寒村ではよくあることですが、実直な村人たちは、丸太や石の上を伝って泥に汚れていない道を進んだのでした。さて司祭は泥んこの真っただ中にはまりこんで、振り向いた時、村の衆に向かって言いました。「皆の衆、なぜお前さんたちは、わしの後からついてこないのか。」村の人たちは「わしら立派なきれいな道があるのに、何を好んで泥にまみれるんですか」と言いました。そこで司祭は口を切って、皆の衆が美德という清らかな道を進むのなら、わしの後について悪徳に汚れた道を進むことはない、などとお説教を垂れました。

第六十九話 冗談

司祭と修道士との間の古くからのねたみの由来は何か

ある時、一人の修道士が世俗の男に、司祭と修道士の間には、古くから憎しみがあるが、それは何に由来するか知っているのかと尋ねました。俗人は司祭を憎み、司祭は修道士を憎む、修道士は逆に司祭を憎み、司祭は俗人を憎む、一方が他方に対し光の前に立てば、お互いに永遠の至福を妨げ合うことになるからだと言いました。俗人は何処からそういうことになるのか分かりませんと言いました。修道士は、「それは卵のせいだよ、修道士が卵を沢山食べれば、司祭も多くの鶏を食う、このように司祭が修道士の卵を高値にすると、修道士が鶏を高値にするものだ」と言いました。

この事を、この本の著者である跣足修道会士ヨハネス・パウリが確証しました。彼はシュトラースブルクの跣足派修道院では、一修道院に六十名として平年度一年間に二万二千個の卵が必要だと計算しました。他の修道院や修道女たちはいよいよ益々、とりわけ肉食しない教団は、この世界が続くかぎり、なんと多くの卵を食うことでしょう。さて卵の全部が孵って、みな鶏になったら、一シリングで六十羽の鶏が手に入る、その鶏が全部卵を産めば六ペニヒで千個の卵が得られる。それで憎しみは卵のせいと言うわけです。この理由がお気に入らねば、別の理由を出して下さい。

第七十話 冗談

悪魔が祭壇へ魚を運んだこと

ある村の司祭は来客がありましたので、上等な魚を買いました。司祭はその魚を弟子に渡して、腹わたを抜き、おいしく煮つけるように命じて、急ぎの短いミサを執行しに行こうとしました。というのはお客は出発することになっていて、前もってミサにあずかり、それから朝食をとることになっていましたから。さて司祭は祭壇の上へ登りましたが、心の中では、ずっと魚のことが引掛っていて、あの小坊主が塩味を利かせすぎやしないかと怖れ、何故わしは自分で塩加減しなかったか、あいつ奴、魚に塩を利かせすぎたら、それこそ台なしだと、自分を責め立てました。そして司祭の頭の中では魚がグルグル泳ぎ廻っておりました。さてミサが主要部になった時、悪魔が司祭の料理人のやり方で祭壇に近づき、魚の入った鍋を祭壇の処まで運んで、「司祭様、塩加減はうまく行ったでしょうか、魚の味見をして下さい」と言いました。

だから凡そ司祭たる者は、料理人や、猟師、遊び人であってはならないのです。つまり司祭にかかわる、この様なことが、ミサを執り行う様な最も慎重であるべき時に、立ち現れ、その邪魔をするからです。聖なる秘跡をとりしきり、また受ける時には、どんなにか大変な準備が必要なことか。俗人も年に一度秘跡を受けに参ずるため、そのような用意をするが、司祭たちはほとんど毎日そうするのです。

第七十一話 まじめ

司祭こそ十字架を前にして歩くことになったこと

昔、数個の村を治めていた修道院長がおりました。この院長は、この村に条例を布きましたが、その条例によれば、誰れか男が婚姻以外に子供を設けた時は、その男は公然たる姦夫であり、人々が教会の周囲を巡り歩く日曜日に十字架を前にして、世間の目にさらさらされて歩かなければなりませんでした。だから公の罪には公の処罰がふさわしいのでした。ところでその村の一人の百姓に子供が生まれました。この百姓は十字架を前にして歩くつもりはありませんでした。司祭はその百姓に何度も警告したので

すが、その百姓はそんなことをしようとは思いませんでした。その後司祭は領主に百姓が条例に従いませんと訴えたのです。こんなわけで百姓が領主の前に立った時、この百姓は司祭に向かって言いました。「院長様、あなたは領主様に対してわしを訴えた理由をもう一度わしに聞かせて下され。」司祭はこれこれしかじかとのべました。その百姓は司祭に向かって、「院長様、あなたの子供たちは、どうもあなたの嫡子じゃありませんな。十字架を捧げて歩き廻って下され。そうしたらわしもあなたの後からついて歩きますよ」と言いました。この様にしてこの御立派な司祭は恥をかきました。

このことについてカートオはこう言いました。「*Turpe est doctori, cum culpa redarguit ipsum.* (その咎は師自ら犯したと証明されたとき、それは師にとって恥である。)」

第七十二話 冗談

犬を聖別したところに埋葬したこと

ある時一人の市民が犬を飼っていました。その犬は主人やその奥さんに大変可愛がられ、神様より小犬の方が少しはましであるかのようでした。この犬は可愛がってもらう術をよく知っていたので、人々は些か戸惑ってから、この犬は前世では人間であったろうと言いました。さて犬が死んだときその市民は村の司祭のところへ行き、司祭様に四グルデン差し上げますので、犬を墓地の聖別したところに埋葬していただきたい、この犬は他の犬よりも賢いのです、と頼みました。司祭は金を受け取り、手配して、犬を墓地に埋葬させました。

司祭が犬を聖別した墓地に埋葬したことを大司教が知って、司祭を呼び出しました。司祭さんは驚き、僧職祿を取られてしまうのではないかと恐れて、男がくれた四グルデンをハンカチに包み、さらに二グルデンを加えて、それを大司教のところへ持って行って、言いました。「大司教様、市民の犬のロイ（犬はこういう名前でした）が、貴方に六グルデン差し上げて、聖別されたところへ埋めてくれるように、遺言しました。」大司教は言いました。「貴方はどの様に埋葬したのですか。」司祭は言いました。「男は犬を袋に入れて夜遅く私の所へ持って参りました。」大司教は言いました。「それは間違っています。貴方は十字架を加えて埋葬しなかったのです、私に十

ニグルデン渡してくれなければなりません。」可哀そうな司祭はさらに十グルデン渡さなければなりませんでした。

金の力をご覧なさい。わたしに十分金があれば、なんなりと思いのものになってみせましょうし、金で人々を釣ってみましょう。たとえ金を受けとらない人がいても、他の人が取るものです。お金には誰も逆らえません。

第七十三話 冗談

ホスチアの中にペニヒ硬貨を入れて焼いた司祭のこと

ある時一人の百姓がいて、四回の献金の際には、いつも手持ちの一番悪いペニヒ硬貨を出す癖がありました。司祭は百姓が一番悪い硬貨を出したことに気づいて、「どのように百姓の心得違いを正したものか」と、考えました。

百姓が参列することになっていた復活祭の時に、司祭は同じ様な悪いペニヒ硬貨を小さなホスチアに入れて焼かせました。百姓は復活祭の日に他の人たちと一緒にやってきて聖餐に出ました。そこで司祭は聖別していないそのホスチアを彼に与えました。司祭はそれを脇に置いておいたのでした。さて百姓は司祭にホスチアを貰って脇の方へ行きましたが、ホスチアを飲み込むことができないので、ぎくりとしました。彼は悪魔が彼を連れて行こうとしているのだと思いました。百姓は司祭に合図をし、耳うちして、言いました。「司祭様、なんと堅い神様をくださったのですか。神様は下がろうとされないのです。」司祭は言いました。「お下がりになるかどうか、ぐっと飲み込んでみなさい。」百姓は言いました。「お下がりになりそうにありません。」司祭は言いました。「神様はどんなお姿だと思うかね。」百姓は言いました。「ペニヒ硬貨の様に思われます。」司祭は言いました。「ペニヒ硬貨で罪を犯したことはないか考えてみなさい。」百姓は言いました。「おお司祭様、私の告解をお聞き下さい。」司祭は百姓を祭壇の陰に連れて行き、告解を聞きました。いつも悪い金を献金していたので、いま神様に罰せられたのですと、百姓は言いました。こうして彼は献金しなかった分をきちんと補い、それに加えて新たに献金しました。司祭は百姓を祭壇の前へ連れて行き、口の中から硬貨を取り出し、本当のホスチアを授けましたが、この百姓はもうそういうことをしませんでした。

この司祭は百姓をだまして正道に帰らせたので、誉められたものではありません。また十分の一税にしる、献金にしる、ミサのぶどう酒や施物にしる、その百姓と同じように神様に何も良いものを差し出さない人たちが沢山います。貴族が斜視やびっこや、瘤があったり、麻痺したり、つまりはかたわ者の子を持っていれば、坊さんや尼さん、それに修道僧にさせるものです。神様は見栄えの良いものを欲しがられないかのようなのです。そればかりか、そんなものはこの世に生じてはならないと貴方は言います。神様には、欠陥があったり、汚れのある獣を捧げてはならない、と昔の掟に記されています。私たちの掟もそうなのです。

第七十四話 冗談

ある司祭の金の保管法

一人の司祭がいました。彼は沢山の金があり、金持ちで、当時の聖職者流儀で金をどこに保管し、隠したのか心配で仕方がありませんでした。取られるのではないかと恐れたからです。その後、聖体安置塔に入れよう、そこが一番安全だと考えました。司祭は金をその中に入れて、その上に書きました。「Dominus est in isto loco. (主はこの場所におられる。)」 「ここには主がおられます。」 そのことを世故に長けた猫のような男がその訳を知って、その入物を開けて金を盗り、その上に書きました。「Surrexit, non est hic. (彼は立ち上がり、彼はここにあらず。)」 「主は蘇りになり、もうここにはおられぬ。」 司祭は悲しみのあまり死にそうでした。

第七十五話 冗談

二人で賭けてミサの経を短くあげる競争をしたこと

ある時二人の司祭が互いに魚料理を賭けて競い、一番短いミサをした者が料理を頂戴することになっていました。一方が他方よりずっと早く終わりました。食卓について、ご馳走の代金を払ってしまったとき、勝った方が言いました。「私は信仰告白と使徒書簡を途中で止めました。だから貴方より早かったのです。」 他方は言いました。「私は福音書を半分にし、信仰告白と密誦を途中で止めたのに、それでも負けてしまいました。」 彼らは救い難い司祭たちでした。

第七十六話 まじめ

二人の司祭でミサのあげ方が違ったこと

ライムンドゥス¹はミサについて韻文でおよそ次のように書いています。二人の司祭がおりました。一方の司祭はあまり長いミサをあげたので、人々はそれを聞くのにうんざりして教会から出て行ってしまい、それを終わりまで我慢できる人は一人もいませんでした。もう一方の司祭はあまり短いミサをあげたので、人々は怒ってしまいました。このことは司教の耳に届きました。司教は二人を呼び寄せ、一方の司祭に、なぜあんなに長いミサをあげたのかと尋ねました。その司祭は答えました。「私はミサの一番大事なところにきますと、その言葉のなかに大変甘美なものを感じて、一語一語に注意を払わざるをえなくなり、先へ進むことがどうしてもできなくなるのです。」司教はもう一人の司祭に、どうしてそんなに短いミサをあげることができるのか、それは冒瀆ではないかと尋ねました。その司祭は言いました。「私は祭壇に上がりますと、不思議な思いや考えに襲われます。不断は決して考えないことがミサの最中に思い浮かぶのです。ですから私はその考えから逃れ、その考えにできるだけ悩まされないよう、短いミサをあげるのです。」司教は言いました。「よろしい。各人が自分の考えに従ってミサをあげるがよい。」

だから俗人たちはこうしたミサをみて、怒ってはならないのです。他人が何を思いわずらっているのかはわからないものです。

第七十七話 冗談

僧院長が教皇は分詞であると証明したこと

昔お人好しの愚直者で、全然学識のない僧院長がいました。この僧院長はあまりの学識のなさ故に教皇のもとへ訴えが出されました。人々はこの僧院長を免職にし、ほかの人を僧院長にしたいと思ったのです。教皇はこの男を呼び寄せ、自分で試験しようと思いました。そして文法について子

1 おそらく Raimundus Lullus (1235-1316) のこと。スペインの神学者、哲学者。

供たちが学校で学んでいることから始めました。もしこの男が小事を知らないならば、大事についても知らず、無知だというじゅうぶんな証拠だと教皇は思ったのです。教皇は僧院長に言いました。「Papa que pars? (教皇の品詞は何か。)」僧院長は臆せず言いました。「Est Participium. (分詞〔分け前にあずかるもの〕です。)」教皇は言いました。「Quare? (何故か。)」僧院長は言いました。「Quia capit partem a clero, partem a seculari cum totius orbis doloris significatione sive modis et temporibus. (何故かと言いますと、教皇は全世界の苦しみを示して、際限なく時を選ばず、聖職者から一部、俗人から一部を受け取るからです。)」教皇は言いました。「お前はそれがわかっているのだから、もっと多くのことがわかっている筈だ。私はお前が現職に止まることを認める。」

第七十八話 冗談

司祭と司教が職を取り換えようとしたこと

或る司祭があまりに学識がないと言って、司教のもとへ訴えられました。司教はこの司祭を呼び寄せて言いました。「お前は今の職には学識不足だと言われている。お前には今の職を代わってもらおう。」司祭は言いました。「喜んで、司教様。私を司教にしてください。そして貴方が私の職を継いでください。」

第七十九話 冗談

三つのミサをあげる童貞の司祭が見つからなかったこと¹

昔ある司祭が悪霊にとりつかれました。長時間にわたる祈禱ののちでも、悪霊は、童貞の司祭が三つのミサ²をあげないかぎり、出て行かないと言いました。身内の者たちはその病人を何とか助けてやりたいと思いました。というのもその司祭は金持ちだったのです。そこでドミニコ会のところへ行き、童貞で、三つのミサをあげる修道士はいないか、もしいたら、

1 原文は「三人の童貞の司祭が見つからなかったこと」であるが、話の内容にあわせて改めた。

2 ルター『卓上語録』3, 336 参照。

その人に三グルデン出そうと言って、探しました。僧院長は言いました。「皆さん、そのような真面目な修道士は学問をしに、旅に出ていますよ。ケルンかパリの大学にいますよ。」身内の者たちは跣足修道会のところへ行きました。無駄でした。修道士たちは行脚に出かけ、托鉢しているところでした。身内の者たちはカルトジオ会へ行って頼みましたが、その人たちはこう言いました。「私たちはそんな世俗のことは引き受けない。」身内の者たちは別の僧院へ行きましたが、その僧院はほかのところでミサをあげなければなりませんでした。更に別の僧院はほかのことで手がはなせませんでした。こうして例の男は悪霊から逃れられませんでした。というのも童貞の司祭が一人も見つからなかったからです。

結婚していない人はいとも簡単に見つかりますが、だからといってその人たちが童貞であるとはかぎりません。生娘が既婚の男のために処女を、未体験の男が既婚の女のために童貞を失うことがあります。これは告解すべきことがらです。大罪が犯されるときいつも二人であるともかぎりません。どの人の心をも乱さないよう、そのことについては控え目に話すべきです。学者たちが格言集第四の書¹で書いているごとく、人間はひとたび花を失い、金の輝きを失うと、進んで不貞のなかにある楽しみを感じることは、知ってもらうために言うておく必要があります。

第八十話 冗談とまじめ

初めてあげるミサで靈魂が救われること

ある聖隠者が靈魂の責苦を見たいと神に熱望しました。ある時天使がそれを見せるべくこの隠者の手を取り、靈魂を煉獄へ案内しました。そこで男はさまざまな罰を次々と見ました。男はそこで片方の足だけ責苦にあっている靈魂を見ましたが、この靈魂は泣き、叫び、身をよじらせていました。そのかたわらには首まで責苦にあっているのに、神を讃え、神がその靈魂を忘れなかったことを感謝し、喜ばしげな様子¹の靈魂がいました。そこで隠者は、これはどうしたわけなのか、と天使に尋ねました。すると天

1 旧約聖書、格言の書、25章から29章までのことと思われるが、該当部分に上記の記述は見当たらない。

使は言いました。「大きな責苦にあっているあの靈魂に、神は次のようにお告げになった。今日あの靈魂の一族に男の子が一人生まれた。この子は司祭となる定めである。そしてその子が初めてミサをあげるとき、あの靈魂は救われるであろうと。だからあの靈魂はあんなにも嬉しげで、神を讃えているのだ。」隠者は言いました。「別の靈魂があれほど身をよじらせて、小さな罰を嘆いているのはどうしたわけか。」天使は言いました。「あの靈魂は自分の救いの時を知らないのだ。だから悲しんでいるのだ。」

初めてあげるミサがほかのミサよりも良いかのように、人々がなぜこんなに集まるのか、わけはいろいろあるでしょう。しかし司祭たるもの、初めてミサをあげるときほど善良で、敬虔で、十分準備していることはないということだけでも考えてみてください。何故なら長い間ミサをあげていると、習慣におちいり、あまり注意を払わなくなり、丁度年老いた寺男や堂守から信仰心がうすれていくように、信仰心がうすれていくからです。だから昔ある立派な説教師がこう言ったのです。「新任の司祭が祭壇をおりるやいなや、袋に押し込んで溺死させることほど良い処置はない。こうすればその司祭は最も敬虔で、最も良い心情で死ぬことになる。というのも万一前もって食事を与えたりすれば、罪を犯しかねないからである。」

第八章 悪霊について

第八十一話 冗談

悪魔が役人を連れて行ったこと

ある時役人が村へ出かけて行って、農夫から借金を取り立てようと思いましたが。その時悪魔が農夫の格好をして役人のところにやって来ました。こうして二人は一緒に歩いて行きました。さて二人が村を歩いて行くと、子供が泣いており、母親が非常に怒って、こう言いました。「さあ泣き喚くがいいさ。お前なんか悪魔に連れて行かれりゃいいんだ。」役人は悪魔に言いました。「あそこでお前さんに子供を一人やると言っているのが聞こえないのかね。どうしてあの子をもらわないんだね。」悪魔は言いました。「母親は本気じゃない。あれは怒っているんだ。」二人は更に歩いて行きました。すると、原っぱに豚の大きな群れがあって、一匹が遠くへ駆け出し

て行ってしまいました。それで豚飼いは走って行き、その豚を再び追い返してこう言いました。「悪魔がお前を連れて行っちゃえ。老いぼれ豚め。」役人はまた悪魔に言いました。「お前さんに豚をくれるそうだよ。どうしてあれを連れて行かないんだね。」悪魔が言いました。「どうして俺が豚と係わらなきゃならないんだ。俺があつ豚を持って行ったら、かわいそうな豚飼いはあつ豚の代金を払わなくてはならないじゃないか。」

二人は役人が金を取立てる筈の農家までやって来ました。農夫は納屋で脱穀をしていましたが、役人がやって来るのを見ると、言いました。「来るなら、来い。こんちくしょう。悪魔がお前を連れて行くがいい。」悪魔は役人に言いました。「農夫が言っていることが聞こえるかね。あれは本気だ。だからお前さんは俺と一緒に来なきゃならんぞ。」そして悪魔は役人を連れ去りました。

だから役人や借金取りは、どこかへ抵当を運び出しに行ったり、借金を取立てに行く場合には、十字を切る必要があります。というのは、そういう人たちは非常に頻繁に悪魔に渡されるからです。

第八十二話 冗談

足萎えが健康な人よりも速く走ったこと

よく言われることなのですが、「悪魔は絵に描かれる程恐ろしくはありません。地獄にいる人々は、私たちがこの世でお互いに馴れ親しんでいるのと同じように、悪魔に馴れているので、彼らをわずらわすものは、もう何もないのです。」そのことに関してこの話を聞いて下さい。かつて二人の泥棒がおりましたが、二人は仲間どうしで、一方が羊を盗んで、もう片方が（この男は勿論馬鹿だったのですが）、胡桃の入った袋を盗むということに意見がまとまりました。そしてそれぞれが自分の獲物を求めて捜し歩き、夜獲物を盗んでお互いに待ち合わせ、墓地の隅の墓石の上で落ち合うことになりました。胡桃を持った馬鹿の方が羊を盗んだ男よりも早く着いて、墓石の上に腰をおろして、胡桃を食べながら相棒を待っていました。

一人の若者が墓地を通りかかり、誰かが胡桃を割っている音を聞きました。若者はびっくりして、とある居酒屋に駆け込んで叫びました。「生身の悪魔が墓地に腰をおろして、胡桃を割っているんだ。俺は音を聞いたぜ。」

この家には生まれつき足の悪い十八才の少年がいましたが、この少年が言いました。「僕は是非一度悪魔の声を聞いてみたいものだなあ。」そしてそこに居合わせた頑強な農夫と話がまとまって、少年が農夫に半グルデン出すから、少年も一度悪魔の声が聞けるように、農夫が少年を肩にかついで、墓地へ連れて行ってやることになりました。農夫は少年を肩にかつぎました。農夫が墓地の真中へやって来ると、件の泥棒が闇を通してこの農夫を見て、これは相棒で盗んだ羊をかついで来たのだと思いました。そして大声で言ったのです。「お前さん、その羊は太っているかね。痩せているかね。」それで農夫はびっくり仰天してしまい、足萎えを放りだして、言いました。「太っていようと、痩せていようと俺の知ったことか。」そして再び居酒屋へ駆け戻りました。農夫が居酒屋に着いた時には、足萎えの少年はもうとっくに中にいました。足達者を追い抜いたのです。あれが悪魔だったら、二人はどんなに怖かったことでしょう。

第八十三話 冗談

悪魔が免罪符と男を連れて行ったこと

ある時二人の市民が、免罪符を受けるために、とある町からローマへと歩いていました。一人は裕福で沢山お金を持っていて、うまく免罪符を手に入れたいと思っていました。しかも最期の時に、罰と罪に対する赦免を与えてもらおうと思っていたのです。貧しい男の方はローマで懺悔だけしました。そしてまた一緒に戻って来ました。道々金持ちは自分の権力と免罪符の自慢をし、大威張りでした。

数年後に貧しい男が死んで地獄へやって来ました。数年後に金持ちも死んで、やはり地獄にやって来ました。貧しい男は金持ちに言いました。「どうしてあなたもここにいるのですか。あなたが自慢していた免罪符はどこに行ったんですか。免罪符はあなたを救ってくれなかったのですか。」金持ちは言いました。「お前さん、私の身に起こったことをまあ聞いて下さいよ。私が死なねばならなくなった時、無学な悪魔がやって来て、私と免罪符を連れて来たのですが、悪魔は免罪符が読めず、私の免罪符は焼かれてしまいました。だから私もここにいるのですよ。」

第八十四話 まじめ

悪魔が娘に城へ行かないようにと忠告したこと

かつて一人の娘が町で奉公していましたが、男たちの度重なる誘惑に悩んでいました。それで娘は逃れたいと思い、とある城に奉公することにしました。娘が登って行くと、柏の木のそばで男の姿をした悪魔が娘に出合い、どうするつもりかねと娘に尋ねました。娘はそのことを悪魔に話しました。悪魔は言いました。「俺ならそんなことはしないな。騎士というものは気まぐれなものだ。お前はきっと後悔するだろう。」娘は言いました。「いいえ、私はうまく彼らから身を守ってみせるわ。」

半年も経たないうちに、娘は妊娠してしまい、子を宿しました。娘は暇を取らされました。というのは、娘はもう仕事に耐えることができなかつたからです。山を下りて行く時、娘はまた柏の木のところにやって来ました。するとそこにまた悪魔がいて、娘に何故泣いているのかと尋ねました。娘は言いました。「私のお腹には子供がいます。悪魔が私にかつて、お城に奉公に上がるようにと勧めたのです。」その時悪魔は娘の頬を打って言いました。「お前は嘘をついている。俺はお前が登って行こうとした時に、行かないようにと忠告してやったじゃないか。」

このように十マイル以内に誰もいなかったら、しばしば悪魔に罪が着せられるものです。Temptatur unusquisque.（誰でも誘惑される。）どんな人もよこしまな欲望に引かれて誘惑されると、ヤコブが第一章で語っています。